
PHANTOM FORD

shauna-crown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PHANTOM FORD

【Nコード】

N0311S

【作者名】

sh a u n a - c r o w n

【あらすじ】

20世紀初頭のイギリス・・・産業革命から100年。大英帝国は世界の先頭を走る大国家に成長していた。

しかし、霧に包まれしこの都はまた、犯罪の温床ともなっており、市警^{ヤード}は毎日のようにロンドンを走りまわり、またソレに比例して探偵の数も相当なものにふくれあがっていた。

しかし、そんな探偵たちの中に、一際異彩を放つ探偵が居た。

彼の名は”ラチェット・シエリンフォード”。彼の名が新聞に載らない月はないとさえ言われる、頭脳明晰なロンドンでは知らない人

間は居ない程の名探偵である。

しかしながら、その実は、どこにでもいるようなヘタレ探偵であった。

では、何故彼がそこまで認知されるに至ったのか・・・

そこには、一人の青年の存在があった。シエリンフォードに代わりに推理をするいわばゴーストライターならぬ、ゴースト探偵の姿が・

・

序章 プロローグ

20世紀初頭……

産業革命の影響で発達した工業はイギリスという国を豊かにした。たった100年されど100年でこの大英帝国は世界のトップへとの上昇がった。

しかしながら……

だからと言って、国が安定期を迎えたかというところでもない。産業の発達は貧富の差を大きくした。

新しい工場は古い農園を潰し、大勢の無職者を出した。そんな無職者がすることといえば2通りしかない。

ひとつは低賃金かつ重労働かつ常に死と隣合わせのホワイトスターラインの造船場で働く事。しかし、そんな事すら出来ない老人や体力の無い者はどうするか……

浮浪者にならざるを得ない。

そして、浮浪者となり果て、心を荒ませた人間はその手を悪へと染めた。

殺人・強盗・詐欺……ロンドンスコットランドヤードは犯罪で溢れていたのだ。そして増えすぎる犯罪はロンドン警察をも圧迫した。

警察官の数は絶対的に足りなくなり、街で走っていない警察官を見ない程になっていたのだ。

そして……そんな環境下でもう一つ増えるものがあつた。

それが、私立探偵である。

この時期のロンドンには数百を超える探偵事務所がひしめき合っていたのだ。

その中で……

ひとり……異彩を放つ探偵が居た。

街行く新聞の一面にその男はでかどとした写真と共に大々的に報じられていた。

ダンディなおじさん。彼を言い表すにはそれが一番良いだろう。

30代半ばの整った髭に鹿撃帽とインバネスコートにパイプとステッキ。まさに英国紳士を絵に書いたような人間だ。

そして新聞の見出しはこうだった。

“ラチエット・シエリンフォード また事件を解決！！ 宝石強盗と一網打尽！！”

ここにも書かれているように彼はラチエット・シエリンフォードという名前である。

100年も続く老舗探偵事務所の所属で、頭脳明晰かつスポーツもできるタバコ好きの名探偵としてロンドンで広く知られた探偵である。少なくとも彼の名前が新聞に載らない月が無い程に……

今では彼を主役にしたノンフィクションの伝記や半生小説などが出ている程に……

だが……

これは新聞や雑誌には載ることのない……もちろん過去も現在も未来も……世間は知る由もない話になるのだが……

実は彼自身、それほど優秀な探偵というわけではない。むしろ、歴史ある事務所といえど、それは親から事務所を継いだというだけであり、彼もほんの10年前に事務所を継いで独り立ちした新規参入組の探偵にすぎなかった。

いや……

むしろ実力からすれば新規参入の私立探偵の方がずっと実力派確かだろう……

では、どうして彼はいきなり優秀で一ヶ月に1度は必ず新聞の一面を飾る程の名探偵になることができたのか……

それは非常に簡単なことだった。

彼の助手が優秀なのである。

名探偵の助手として常に彼に付き添っている若者……歳は18歳の栗色の髪の少年。

顔立ちも良く、しかし身なりは着古した黒のトレンチコートという御世辞にもキレイとは言えない……まさに脇役のような服装だった。しかし……驚くなかれ……

実はシエリンフォードが解決してきた事件の数々は全て、彼の推理によるものなのだ。

著名人が直筆小説やエッセイなど本を出すケースがあるが、実は別人が代筆をしているケースがその多くであるという話があるように、それと彼は同じくシエリンフォードの代理で推理をし、それとなくシエリンフォードに教える。

つまりゴーストライターならぬゴースト探偵。

それがこの少年の正体。

とある事情で探偵になれない彼はこうして事件を解決するのである。

そして、今日もまた……

「犯人は君だね！リーマス殿！」

ロンドン橋の下で、今日もシエリンフォードのトンちんかな推理が叫ばれた。

「君はかつて、この死体となった老人とモメていたそうじゃないか……そして、昨夜、君は積もりに積もった積年の恨みを晴らす為に、ナイフで彼の心臓を刺殺したのだ！」

「な……何を言っているんですか！？僕はそんなことはやっていません！！」

「証拠も揃ってるぞ。もう逃げ延びるのは無理だ」

いつものセリフ。いつものやりとり……

それを聞いて、少年は思う……

ああ……そうか……一番怪しい老人の仲間を俺がわざと疑って馬鹿な推理を展開し、最終的に怒られてまで彼が犯人でないことを分からせたというのに……シエリンフォードはそこで推理をやりなおさずに、2番目に怪しい男を追求するのか……と……

「さあ、レイナード警部！彼を逮捕しなさい！」

だが、呆れた推理でも名探偵として名の通った男の推理……言われたとおり警部は手錠を持って、彼に近づく。

「違います！警部！この男は何を言ってるんですか！！本当に僕はやってない！！」

「わかったわかった……事情は署で聞こう……」
そんな普段どおりの会話……

さて……そろそろ助け舟を出さねば……

「待つてください警部さん」
笑顔で話しかけて警部を止める。

「なんだい？エルシャール君？」

「すみません……またシェリンさんの悪い癖みたいでして……」

「なんだ、またか」

そういつて警部は笑って元の位置へと戻る。

「シェリンフォード殿。現場を和ませる偽りの推理はもう十分です
ので……そろそろ本当の犯人を教えてもらってもよろしいでしょう
か？」

「は？何を言ってるんだ……この男が犯人……」

「またまたシェリンさんってば……この男の人が犯人じゃないこと
なんて一目瞭然じゃないですか。だってさっきの推理には大分無理
がありますもん」

「そ……そうだな……ハハハ……すまないすまない……ではエルシ
ヤールくん。本当の推理に行こうか……」

「はい。シェリンさん。犯人は一番端の……」

「そう……あなただ！未亡人の奥さん！！」

叫んだ本人が一番びっくりしてるようだが……もちろん宣言された
未亡人の奥さんは罵詈雑言と共にシェリンフォードを批判する。

その間にエルシャールはシェリンフォードに細かくヒントを与えて
いく会話をするのだ。

そして、すべてを理解したシェリンフォードが種明かしをする。そ
れがいつものセオリー。

「あなたは、おそらく……彼が寝ていた川辺の小屋の中に練炭を置
いたのでしょう。あの小屋は湿気に負けぬように防水性能もかなり

高い。よって外に空気が漏れることはなかったのでしょうね。」

「でも、どうやって閉じ込めるのよ！」

「それは簡単です。あの老人は浮浪者だった。ならば今宵の宿にも困っていたはず。そこに鍵の開いた小屋があったら入るでしょう。まるでねずみ取りの如く……。餌のチーズの代わりは……。温かい毛布といったところでしょうな。そしてあなたは外から鍵をかけた。

元々は昼間つかう為の小屋です夜は施錠されてるのは普通なはずだ。それに場所は川辺……。家もなく気がつく人間も誰も居なかったのですな。仮に気がついたとしても建設中の橋の工事が長引き夜半までかかっていると思われ、誰も気にしないという寸法です。ナイフの出所を調べれば動機としては十分なはずです」

「だったら動機は！動機はなんだっていいたいの!？」

「動機はこれです」

と……。先程もらってきた裁判記録を提示する。

「あの浮浪者はあなたの夫の会社の金を使い込み、倒産させ、そしてあなたの夫を自殺に追い込んだ人だった。ずっとずっと殺す機会を伺っていたのでしょうか」

そう言くと、未亡人の奥さんは泣き崩れた……

そしてペラペラと語り出す。あいつが悪いだの、夫との思い出のを……

それを聞いてシェリンフォードは静かに哀れみ慰めの言葉と人生論を語り、軽くポンツと肩を叩く。

でも、まあ……

エルシャルルは、そんなことに興味はなかった。

事件さえ解決出来ればそれでいい。

「今日も見事なサポートだったよ。エルシャルルくん」

「ありがとうございます。シェリンさん」

こうして一件落着。名推理は完結するのであった。

エルシャール・キスショット。

本名と偽造のファミリーネームの18歳の少年。
それがこのゴースト探偵の名前だった。

自ら探偵になれない憐れな名探偵の。

探偵に理由は簡単だった。

彼が前科者だからだ。

人殺しの前科者だったから……

10歳のある冬の日。

パンも買えないほど貧困した父子家庭で、アルコール中毒だった父親は酒が買えないことに怒り、息子に銃を突きつけた。

息子は命の危険を感じ、台所へと行き包丁を握った。

父親の発砲で少年は右肩と心に傷を追った。

そして……息子は自らを守るため、包丁を父に突き立てた。

殺すつもりはなかった……だが、包丁は父親の腹部を捕えてしまった。

息子は怖くなってそのまま逃げ出した。

普段から酒乱で大声が耐えないその家から父親は悲鳴をあげた。でも誰もそれが断末魔だとは気がつかなかった。

父親はそのまま出血多量で生き絶えた。

こうして……息子は10歳で父を殺し前科者となった。

数年間の更生房での生活を終え、出所して彼は仕事を求めてロンドンに向かった。

でも、仕事は見つからなかった。

必然。殺人犯を雇うなんて物好きな店があるはずもない。

同時にそれは、小さい頃からずっと夢見ていた悪人を捕まえるという夢の頓挫でもあった。

殺人犯が探偵だなんて……麻薬中毒者が麻薬取締官になるようなものだ。

完全に途絶えた夢と生きる場所を失ったとき……見つけたのが路地裏で裸で呑んだくれていたこのシェリンフォードという男だった。どうやらポーカーで負けたらしい。愚痴を言いながらも、この男は酔った勢いで物好きにもエルシャールを拾った。

そして3年……

シェリンフォードは名探偵となり、エルシャールはそのゴースト探偵となった……

そしてこれは……

そんなゴースト探偵の……

いや……シエリンフォードの専用の幽霊探偵……
“PHANTOM FORD”になることを決意した青年の物語である。

序章 プロローグ (後書き)

推理小説初挑戦です。

見えざる脅威（前書き）

第二話です。いよいよ事件開始

見えざる脅威

祝杯・・・というのだろうか？

街のバー・・・といえば聞こえはいいのだが、実際はそんなに立派なもんじゃない。ポロポロのほったて小屋にわすかばかりの料理とぬるいビールが置いてある程度の店。

いわば大きめの屋台といってもいいかもしれない。

そんな中で、シエリンフォードとエルシャルはそのぬるいビールとソーセージ&チーズで乾杯していた。

イギリスの法律では16歳でも料理と共にであれば酒を呑むことを許されている。その為にエルシャルもビールを呑んでいるのだが、彼自身それほど酒が得意なわけではない。

だが、シエリンフォードと飲む酒は、嫌いではなかった。

この店で唯一許せる味のメニューであるソーセージを食べながらシエリンフォードは笑う。

「しかし、今回の事件も完璧だったな！どうだった私の推理は！？」

「ギャグがキレキレでしたね」

「そうだろそうだろ！ワハハハ！！」

2人以外誰も居ない店内でシエリンフォードは大声で笑い、ビールをグビグビ煽る。

謙遜とはかけ離れた室内。マスターはグラスを拭いている。

そこで2人の声だけが響く。だが、なんとなく悪くない……

そんな会話を30分程度続けていたところに……やっとこの店で4番目の声が響いた。

「ヤッホー！何々、また打ち上げ？」

軽い言葉と共に、入ってきた女性は一直線に2人のテーブルへと向かってきて席に着く。

しかし、店はボロボロなのにこの女性は場違いにも美しいドレスに身を包み、その上からきれいな漆黒のミンクの毛皮のコートを羽織っていた。もちろんシエリンフードもそれなりにいい生地を着ているのだが、なにぶん色合いがベージュとブラウンの中間色みたいな色なので、ボロボロの黒のコートを着ているエルシャル同様ほとんど店での違和感は全くと言っていい程無い。

「なんだジェニス・グランチェスタ……男の世界に女が入ってくるんじゃない……」

シエリンフードは叱責するが、ムツとした顔でジェニスも言い返す。

「別にあんたに会いに来たわけじゃないわよ。私は自分の彼に会いに来ただけ……それにいいの？　せつかくピザ持ってきてあげたの」

「よく来たな……」

食い気味にグツジョブの指のままシエリンフードがウィンクした。いや……ここはバーなんだから持ち込みはマズイだろ……まあ、この店の料理は激マズだし、マスターもそれがわかってるのか咎められたことはないが……

テーブルの上にピザを広げ、彼女自身は持ってきたロゼワインを呷

る。

「ってかジエニスいいのか？ 今日オペラの公演は？」

「今日はオフなの。代わりはロサがやってくれるから……彼女も今すっごい人気なんだから一回見に来てよ……」

「チケット買えないって……」

「ってか、そんなに見に来てほしいなら、チケットくれればいいと思
うんだ……王立劇場の人気No.1オペラ歌手なんだから……ちなみ
にロサ・グラウカというのは同じ劇場に最近入った新人である。こ
の前紹介されたが意外と普通の子だった。でもそこまで上手なら一
度観に行つて見たいかも……」

「そんなことをエルシャルが考えていると、隣から頬を強くつねら
れた。」

「ちょっと！彼女が隣にいるのに、今他の女のことかंगाえてたな
！！」

「そう……今の言葉からもわかるように……No.1オペラ歌手で美女
で18歳で人気者の彼女が……何故かエルシャルの彼女だった……
ちなみに、経緯いきわづかを話すとするなら、それはたまたまぶつかって口論
になつてという安いラブコメでも化石と化したシチュエーションな
ので絶対に言いたくない……」

「それで……今回はどんな事件だったの？ 大きな事件？」

「殺人事件……まあ、ある意味死んでも当然とも思える人だったん
だけだね……」

「探偵とは思えないセリフね……死んでいい人間だなんて……」

「俺は探偵じゃない……ただの人殺しだよ」

「どんな人が殺されたの？」

「金に汚い爺さん。企業から盗んだ金でギャンブル、縁の切れた娘夫婦にタカつてギャンブル、そして全部負けて、街行く人に当たり散らしながら民家の軒先で迷惑に寝るっついう……」

「うわぁ」

「だがしかし……死んだほうがいいわけではない……せめて生きる価値が無いと言いなさい」

「いや……シエリンさん……それはそれでひどいと思いますけど……」

「まあ、そんなことを言い出したら私や君だつてそうか？ 今まで解決してきた事件には迷宮入りになった方がいいものだつてあつた」

「ああ……例えば、この前の遺産と家族を守るために家庭内暴力の絶えない夫を殺した妻とかですか？」

「まあ、それもだな……他にも飼い主に苛められ続けた猫が惨めになつて大切に飼つてあげていた女とか……正直、飼い主に戻すのは辛かつたよ……だが、それが私たちの仕事だ。正義不正義に関わらず、金を貰つて私情を挟まずひたすらに職務を処理する。それが探偵だよ」

「……そう……ですかね……」

「そうだと探偵とはかくも汚い商売だ」

「……そう……ですね……」

「しかるに……」

「はいはい！！そこまでー……」

手をパンパンッと叩いてジェニスが会話を打ち切つた。

「私がつつかくオフで来てるんだからそういう暗い話しないの！せつかくの祝杯でしょう？」

「そうだな……」

「その通りだ。いい事言うじゃないかお嬢ちゃん。舞台のセリフか何かの受け売りかい？」

「あんまりナメてると開けた酒瓶で殴るわよ」

「……ごめんなさい……」

「打たれ弱わ!？」

「ま……まあともかく何だ……そういえばまだ乾杯をしていなかったな!! お嬢ちゃんも来たことだし、今更だが祝杯としようじゃないか!」

「あ……はい……」

勢い良くビールを掲げようとするシェリンフォード……だが……

「それじゃあいくぞ! せーの!! か

掲げようとしたその腕は後ろから突如現れたとある人物によって掴まれてしまう。

ん? と振り返るシェリンフォードだが、その顔はすぐに嫌そうな苦渋の表情へと変わった。

「残念だが、乾杯は中止だ」

シルクハットのスーツにマントの男。誰などとは今更無粋な関係の男だった。

レイナード警部。42歳既婚2人の子持ち。英国首都警察の警部。スコットランド・ヤード

少々頼りない印象があるが、実際はロンドン新聞各紙にその捜査ぶりを讃えられる名物警部である。だが毎回自分の手に余る厄介な事件が起こるとシェリンフォードに事件の捜査を依頼する男。つまり、名物警部が解決できない事件が回ってくる……それだけ厄介な事件が……

「シェリンフォード……仕事だ行くぞ」

「……私は今ビールとソーセージで乾杯しているんだが……」

「おおそうかそれは悪いことをしたな……さつさと黙って鹿撃帽を被って、インバネスコートを着ろ。行くぞ」

「いや……だから私は今オフで……」

「来ないなら仕方ない……君には反国非協力罪、退廃思想、怠惰な男でいる罪、猥褻物陳列罪などがかかっている……80年ぐらい刑務所に入るか？」

「おまつ……昔、無罪放免されたじゃないか!？」

「釈放はしてやったが無罪とは言っていない。お望みならいつでも放り込めるぞ？ シェリンフォード……」

「わ……わかったよ……行けばいいんだろ？ 行けば……」

「モノ分りがよくて助かるよ……さあ、エルシャル君。君も支度しなさい」

「じゃあ、私は帰るわね」

「いや……ジエニス殿。あなたにも来てもらおう……」

「なんで私が？」

「殺されたのが君の関係者だ。一応確認目的で付き合ってもらいたい」

「……関係者？ 家族ならとくに他界してるから居ないわよ？」

「関係者だ。来てもらってよろしいかな？」

「……悪いけど明日の夜8時からオペラがあるの。だから最低でも15時までには劇場に行かないといけないのだけれど」

「もちろんだ。警察の馬車で送らせていただく」

「……気に入らないけど……そういうことなら仕方ないわね」

「では表の馬車の方へ……」

恭しく警部が御者の如く彼女を馬車へと誘う。実は彼、ジエニスの熱狂的なファンだったりする……もしかして単純に彼女と一緒に居たいだけではないのだろうか……本当に嫌な事件になったらこれからはコレをネタに“奥さんにバラすぞ”とか言おうとこっそり心に誓う。

「さあシェリンフォード、エルシャルぐずぐずしてられないぞ。早く表の馬車に乗れ……」

さつきとはうって変わった態度になったレイナード警部に急かされ2人は馬車に乗る。そしてジェニスに見送られながら2人はガラガラとまるで拉致のごとく夜の帳へと消えた。こうして僅かながらの祝杯を楽しみ余韻もなく新たな事件が幕を上げたのだ。一生忘れることのない事件が……

現場についたのは午前3時を過ぎた頃だった。

そこはロンドン郊外のホテルだった。マイルストーンホテル。大低帝国の誇る名門のホテルだ。だが、シーズンオフの今の時期はそれほど多くの客が泊まっているわけではなかった。

しかし殺人事件はそんな63しか部屋のないホテルの一室で起きた。

201号室はまさに血の海だった。スーツ姿の一人の男が入り口から最も遠い壁際でその背中を壁に預けて死んでいた。ただ、眼や口を見開いている。おそらく相当驚いたのか焦ったのか……少なくとも自殺ではないだろう。

そしてその被害者を見て、ジェニスが驚嘆の顔を見せている。彼女の関係者だと言うのはどうやら本当だったらしい。

「レイナード警部。事件の説明を」

シエリンフォードの言葉に警部が頷く。すぐにエルシャルルはメモの用意をした。

「被害者はノーウッド＝リゼル……王立劇場のプロデューサーだ。ここには次の舞台の打ち合わせで滞在していたらしい……済まないがジェニス殿。この男の情報に間違いはないか？」

「ええ……あつてる。間違いなくウチの劇場のプロデューサーよ。3日後にこのホテルの近くの劇場で公演があるから、その打ち合わせだったんでしょね」

死臭に耐えられないのか口と鼻をハンカチで多いながら彼女はそう告げた。

「3日後というと……土曜日の夜か……そこで公演？」

エルシャルルの言葉に呆れたようにジェニスが答える。

「知らなかったの？王立劇場とライバルのタイニン記念劇場とのクラブで“白鷺の水辺”って演劇をやる予定だったの」

「ロンドンで今最もチケットが取りにくいとされる公演だ」

ジェニスマニアの警部だ……きっとしっかり調べていたのだろう……

……いや……すでにチケットも入手済みかもしれない……後、休暇も

……

「警部。続けてくれ……死因と死亡推定時刻を」

シエリンフォードの言葉に警部が咳払いして続けた。

「死因は銃撃による失血死。死亡推定時刻は今から約10時間前の午後6時〜午後8時といったところだろう」

「第一発見者は？」

「ホテルのボーイだ。10時に頼まれたルームサービスを持っていたところ、返事がないため、ドアノブに手をかけてみたところ、鍵が空いており、中に入り遺体を発見した」

「じゃあ、そのボーイが犯人だろ……」

「当然その線は調べたさ……だが、彼はずっと厨房で仕事をしていた。複数の人間と一緒にね。アリバイは完璧だ」

「……そうか……なるほど……」

「従業員には全員アリバイがあった。疑いがあるのは容疑者は数人全員ホテルの客だ。それもその全員が王立劇場とタイニーン記念劇場の関係者だ。そこで、わざわざジェニス殿を呼んだわけだ」

「なるほど……関係者なら警部より私の方が詳しいからね」

「そういうことだ」

その後もシエリンフォードと警部の会話が続く。その間にエルシャールは室内の捜査を開始する。

死因はやはり銃撃だろう。服が焦げてないからゼロ距離から撃たれたということはないと思われる。銃痕は3つ。左胸に2発右胸に1発。それ以外の外傷はない。いや……冷や汗で大分襟とかが濡れているが……

と……エルシャールはあるものに気がついた。

ん？ これは……

そこにあつたのは木片だった。しかしただの木片ではない。泥が結構付着している。

「警部。これは？」

エルシャールがつぶやくと警部の視線がこちらに向いた

「ああ・・・よくわからないが、おそらく被害者が持ち込んだものだろう。事件との関係性は薄そうだ」

「ダイニングメッセージという可能性は？あるいは犯人の手がかり」

「「！？」」

「・・・なんでそこでシエリンさんも警部も驚くのだろう・・・普通まずそれを疑うだろう・・・」

「でも、泥のついた木よ？何のつもりかしら？」

「わからないけど・・・でも一応なんでも疑ってみないとね・・・」

2人の会話がちょっと恋人っぽく話していると、後ろから警部とシエリンさんの咳払いが聞こえ慌てて距離を離す。

「・・・とりあえず警部・・・重要参考人に会いたいのだが・・・」

「ああ・・・別室に待機してもらってる・・・行こうか・・・」

警部のその言葉で4人は静かに部屋を出て別室へと向かった。

迷宮という名の事件は続く

見えざる脅威（後書き）

いよいよ事件です。

やっとメインストーリーといったところ・・・

ただまた登場人物すら出揃ってないという・・・

あ・・・ちなみにラブコメにはなりません。

では、お楽しみいただければ幸いです。

重要参考人

別室の宿泊客専用サロン。

ジェニスとエルシャルルに残りの捜査を命じて警部とシェリンフォードは先にそこに入った。
そこに5人の人物と2人の従業員が揃えられていた。

部屋に入るなり全員の視線がシェリンフォードへと集中する。

「誰？あれ？」

「ああ……名探偵と噂の……」

「ラチエット・シェリンフォード……」

「いよいよ警察も打つ手なしか……」

口々に聞こえる不満の声……まあ、殺人現場で殺人犯として扱われていれば当然だろう。

「警部……彼らの紹介を」

シェリンフォードの言葉で警部が小さな手帳を開いた。

「右からいくぞ」

全員の視線が一番右端の銀色の髪と真紅のドレスのきれいな女性に集まった。

「まず、シルバー・ブレイズ殿……27歳。タイニーン記念劇場の

トップオペラ歌手だ。このホテルに居たのは先ほどと同じ、王立劇場との共同公演の打ち合わせの為だ」

「ふむ……失礼ですが、事件当時は何をしていたのか教えていただいてもよろしいですか？」

「……事件当時は部屋で寝てたわ。打ち合わせが長引いて疲れたたの。文句ある？」

ムスツとした調子で彼女が応える。それを慌てて警部が宥めた。さすがオペラ好き……彼女にもジェニスと同じように興味があるのだろう。

そして次の人物であるシルクハットとスーツの老齢の男へと視線が移る。真っ白な髪と鷹を思わせる顔が特徴的だった。

「次に、セント・サイモン殿。タイニン記念劇場のプロデューサーで先程殺害されたノーウッド殿が監督を、彼が演出を務めるはずだったらしい。やはりホテルに居たのは打ち合わせの為だ。役柄は助監督兼演出家」

「ふむ……あなたは事件のあった時間は何をしておられましたか？」

「部屋で台本を読みながらブランデーを飲んでいた。」

「わかりました……ありがとうございます」

そしてまた次の人物。

今度はきれいな顔立ちの女性。短髪にパンツスーツが美しさと秀麗さを引き出している。

「カトリーヌ・カニングム殿。王立劇場の女優で、主に男役を演じる。やはり打ち合わせで来ていたということだ」

「ふむ……あなたはなにをしてらっしゃいましたか？」

「気分転換に散歩してた」

「その時に怪しい人物などは見ませんでしたか？」

「知らない。残念ながら散歩していたのは裏庭だったのでね……部屋がエントランス側な彼が死んだのは後から警察から聞かれて知った」

「そうですか……ありがとうございます」

そしてまた次の人物へ……今度はやたら派手な服を着た男……なのか？ や、なんとなくお姉マンと言ってもいいかもしれない……

「パーシー・フェルプス殿。王立劇場のスタイリストだ」

「犯人じゃないわよー」

野太い声が響く。

「フェルプス殿。申し訳ないが、アリバイが無い以上、一応話しは聞かせてもらわなければならぬ……あなた方の無実を証明するためだ。ご協力いただきたい。」

「……失礼……ノールウッド監督が殺された時間は新しい口紅の調査を部屋でしていたわ……」

「そうですか……」

「次に行ってもよろしいかなシエリンフォード？」

「ええもちろんです警部……」

「ミリアム・ファースト殿……タイニン記念劇場の男優」

短い説明とともにシエリンフォードが言葉を継ぐ。

「事件当時は何をしてらっしゃいましたか？」

「部屋で風呂に入ってたかな？」

「2時間も？」

「半身浴という入浴方法があるのですよ」

「ああ……文献で読んだことが……腹部までの湯に入浴し、汗をかくことでダイエットや健康に良い効果があるとか……」

「なんだ……シエリンフォード殿はご存知ですか？」

「あくまで文献で読んだことがある程度ですが……」

「シエリンフォード……次にいくぞ」

「ええ、警部」

「ここからは2人の従業員だ……ジョエル・ロブション殿……このホテルのオーナーで、事件当時アリバイが無い。もう一人はコックのアンリ・ゴー殿だ」

恰幅のいい老齢の男性と痩せたコックコートの男が静かに頭を下げた。

「ジョエル殿とアンリ殿ですね……失礼ですが、事件のあった時刻は何を？」

その問いにはジョエルが2人分応える。

「私は自室で書類の整理を……彼は地下の倉庫で残りの食材のリストと明日の発注リストを製作してもらってました」

「間違いないですか？ジョエル殿」

「ええ……間違いありません。なんなら作ったリストを持参しましたよ」

「……わかりました」

全員の証言を聞き終え、シエリンフォードは頭を抱えた。

犯行当時アリバイが無いのはこの人物達だけ……ということは、犯人はこの中にいるということになる。もちろん犯人が外に逃げた可能性を考えるなら話はまたかわってくるが……

「ともかくだ！」

最初にその言葉を発したのはサイモンだった。

「早くここから帰らせてくれ！」

それを皮切りに他の者達も次々に声をあげる。

「そつだそつだ！」

「私、明日は舞台の稽古が…」

「人殺しのあつたホテルなんか居たくないわ！」

思い思いに好きな事を口にする面々。

そして最後にフェルプスが、

「とうか…この中に、殺した人が居るかもしれないでしょ？」

その言葉を呟いた瞬間・・・その場にいた重要参考人たちの表情が凍りついた。

この中に犯人が！？

「ふざけるな！！！」

サイモンが怒鳴り立ち上がる。

「私は帰らせてもらおう！」

ズンズンと足音を響かせながら彼はそのまま扉の方角へ早足で歩き出した。

それに習い他の人間もどんどん同じように「私も…」「私も…」と

歩んでいく。

慌てて警部が止めに入るが、興奮しきった面々は一切言う事を聞かない。彼や他の警察官を強引に突破してでも玄関へ向かおうとし、大声で、「馬車を呼べ！」と叫ぶ。

まさに収集がつかない状態。そんな中でやっぱり落ち着かせるための一言を放ったのはあの人物だった。

「よろしいのですかな？」

シェリンフォードがそう呟くと同時に、全員の視線が彼に集まった。

「どういうことだ!？」

「考えても見てください。この中に殺人犯が居るとなればみなさんが一人になった瞬間に襲うことも十分考えられます。ならばこの間にできるだけ全員で居て、今後の対策を考えたいほうが、よろしいかと思いますが……」

すると全員が静かに自らの座っていた席に戻り始める。

さすが、世間で評判の名探偵の一言。それにシェリンフォードはことういった人の心を捜査することを自然と身につけている。

ことういうところは真実の名探偵であるエルシャールですら感心せざるを得ない。

全員が席についたところで、シェリンフォードは自然と紅茶を注文し、それが届き、落ち着かせてから話を始めた。

「さて……もう一度状況を整理させていただきます。被害者はノーウッド・リゼル。王立劇場のプロデューサーで、滞在理由はタイニーン記念劇場との共同歌劇“白鷺の水辺”の打ち合わせの為。死因は銃による近接射撃3発。左胸に2発、右胸に1発。後はダイニングメ

ツセージかわからないが……彼の傍には泥のついた木片が落ちていた。

私を知っているのはその程度だが……警部。他に情報は？」

「発見当時、窓には鍵がかかっていた。さらにドアにも鍵こそかかってなかったが、ボーイが見つけたときにはドアストッパーのチェーンが掛かっていたらしい。その隙間から覗いて彼が大量の出血と共に倒れているのを発見したそうだ」

「それに被害者の部屋は二階。午後6時〜8時の間といえば、部屋の面している庭園にもまだ人はそれなりにいたはずだ。そんな環境で窓から侵入するなどという行動をすれば自然と誰かに見つかっていてしかるべきだな」

「じゃあやっぱり廊下からということか？」

サイモンの言葉に警部が首を振る。

「おそらくそれはないでしょう。このホテルのすべての部屋の鍵は細やかな細工によるウォード錠を使用しております。一応マスターキーもあります。それはホテルの金庫で厳重に保管され、外に持ち出せるのはこのホテルの支配人と副支配人のみとなっています。当然疑いでしたが、犯行時刻には2人ともアリバイがありました。すなわち鍵は外側からでなく内側かあ掛けられたこととなります」

「じゃあ、自殺なんじゃないの？」

状況を聞いていたブレイズがそうつぶやくが、警部が言い返す。

「我々も当初その線で捜査しました。しかしながら、部屋の鍵は内部にあったのですが、拳銃はいくら探してもみつきありませんでした。さすがに自らの体を撃ち、その後でわざわざ部屋の外に持ち出すの

はどう考えても不可能でしょう」
「なるほどね……」

それを聞いてエルシャルルも静かに頷く。なるほど……ドアチェー
ンか……確かに厄介ではある。内鍵と違い、ドアチェーンは……
仕方ない……助け舟を出すでしょう。

「シエリンさん……」

エルシャルルが発言するとシエリンだけでなく全員の視線が彼に集
まった。

「7ヶ月前の事件を覚えてますか？」

「……ああ……アパートの密室殺人か……」

「ええ……あのトリックを使えば簡単に……」

「どういうことだ？エルシャルル君」

警部がそう言ってくれて本当に助かった。シエリンさんに話を振っ
ていたら、とてつもなくまた回りくどい誘導をしなければならぬ
ハメになっていた。

「輪ゴムを使うんです。まずドアのドアチェーンの入り口の延長線
上に画鋲を固定します。次にドアノブに輪ゴムを通し、画鋲に引っ
掛けてから自分が外に出て、垂れ下がっているドアチェーンの先に
その輪ゴムの先端をひっかけて、ドアを閉じると、輪ゴムが収縮し、
その拍子でドアチェーンがストッパーに入って鍵がかかるという仕
組みです。演出家ならたくさん台本を輪ゴムでとめて持ち歩くこ
とは普通ですから、部屋に輪ゴムの2、3個落ちていたところで一
切問題はないと思いますし……」

そのトリックにシエリンすら驚いていた。いや……あなた俺と一緒に

にあの事件解決してたでしょ？

「と！ともかくだ！！これで殺人事件ということが分かってもらえたでしょう！」

あわてて警部が話を本筋に戻し、全員が深刻な顔になった。

自殺の線が消えたことで、この中に殺人犯が居る可能性があるという話が真実味を増したからだろう。

「とりあえず、今度のことをお話しします。今夜みなさんはこのホテルの3Fの部屋にご宿泊いただきます。お部屋は全部で6部屋程をご用意いたしておりますので、悪いがシェリンフォードとエルシャールは同室で頼む。もちろん倫理的に女性と男性は別々の部屋になります。また宿泊する部屋はまとまって階の角に集めてありますので、我々の警護も行き届くことと思しますのでご安心を」

警部の言葉に全員が無言で承諾した。

だが……ここにいる全員が知らなかった。

この殺人事件が……連続殺人事件へと昇華する事実を……

迷宮と言う名の事件は続く。

重要参考人（後書き）

本来ならあらすじを乗せて綺麗に書いていたのですが投稿中ミスって記事が消えました。次からは気をつけます。今回は許してください。

ちなみに私自身も失恋して鬱病になってしまいました。そのせいで小説を書く意欲も起きず随分と時間をおいての投稿となってしまうました。次話からかなり時間はかかるとおもいますがしっかりと書くつもりで居ますので気長にお待ちください。

捜査方針（前書き）

あらすじ

警部の依頼で事件を解決しにロンドン郊外のホテルにやってきたシエリンフォードとエルシャールとジェニス。

そこで殺されていたのはジェニスの劇場のプロデューサーだった。浮かび上がる容疑者達。だが、事件は簡単には解決しそうになかった。

捜査方針

シエリンフォードとエルシャルルの部屋のドアが叩かれたのは空が白み始めた午前4時のことだった。

眠い目をこすりながらシエリンフォードが猫のパジャマのままドアを開ける。

するとそこに立っていたのは

「起きろ、シエリンフォード!! 事件だ!!」

すでに着替えを終えた警部だった。いや警護のため一睡もしていなかったのだろう。

しばらくそのまま眠そうな目で動きを止め、しばらく考えた後で

……

静かに何事もなかったかのようにドアを閉じる。

当然ドカドカとけたたましい音で再びドアが叩かれ、2人は外に出されることとなった。

服を着替え、2人は警部と共に、301号室へと向かった。

夜も明けきらぬその部屋は暖炉の焔がまだくすぶり、明かり取りのために灯された蠟燭も小さな焔でチロチロ燃えていた。そのせいでどこか部屋が暗い。

そんな中で……

ベッドに一人の男が苦悶の表情と共に倒れていた。慌てる様子もなくシェリンフォードとエルシャルは手袋をして彼に近づき、首筋と手首と眼球を確認する。

「死んでますね」

「ああ……」

手袋を外しながら2人はそう呟いた。そして人物の確認をする。

「彼は確か？」

「セント・サイモン……王立劇場と対を成すタイニーン記念劇場のプロデューサーで共同歌劇では演出を務めるはずだった人間です」

「死因は？」

「青白い顔と外傷が見られないことからおそらく薬物による中毒かと……」

「警部。科学捜査研究所に彼の死因の調査をお願いしてもよろしいですか？」

「すでに提案した。結果はすぐに出る」

「ありがとうございます……では警部……申し訳ありませんがもう一つ。全員をできるだけ早く一つの部屋に集めてくださいますか？」

「……努力しよう」

そして……

「シエリンさん……」

エルシャールは静かにとあるものを見せる。それはレンガと漆喰の板だった。

「あの木片同様。ダイイングメッセージの可能性があるな……」
「確定でしょうね。」

1時間後。

寝間着から普段着に着替えた全員が食堂へと集められた。

サイモンの死亡報告を受け、泣き崩れるブレイズ。そしてそれを慰めるカトリーヌ。一方でフェルプスもショックを受けているようだが、彼だけはなにか思いつめているようにも見えた。

「フェルプス殿。どうかしましたかな？」

「い……いいえ、なんでもないわ。気にしないで頂戴」

警部の問いかけにぎこちない笑顔で彼が笑う。

部屋の片隅で見つつかエルシャールは顎に手を添える。

さて、状況を整理しよう。まず最初の殺人ではリゼルが銃殺された。トリックは密室殺人。過去にとあるアパートで起きた事件を参考にするれば、トリックは明白だからおそらく殺人事件。

そして、次の殺人ではサイモンが殺された。死因はおそらく毒殺。

「警部。サイモン氏が発見されたとき、部屋に鍵は？」

「かけられていた。密室殺人だ」

「ですか……………」

密室殺人。それ以外に2つの事件に一貫性はないように見える。

だが、2人はそれぞれ王立劇場のプロデューサとタイニン記念劇場のプロデューサ。

おまけに遺体の傍にはそれぞれ泥のついた木の板とレンガ&漆喰の板。

これらは何を暗示しているのだろうか……………

すると……………

「何一人で難しい顔してるの？」

ジェニスがそう呟き顔を覗き込んできた。

「なあジェニス。殺された2人のプロデューサーって恨まれたりしてなかったのか？」

エルシャールの言葉にジェニスは嘲笑した。

「恨まれてなかったですって？そんなの決まってるじゃない……」
「だよな……」

「恨みなんて売るほどあるわよ」

その言葉にエルシャールが絶句した。

「え？」

「だから……彼らに恨みを抱いてる人間なんて売るほど居るって事」

「どういうことだ!？」

エルシャールの大声に全員の視線が集まったが、なんとか笑いでごまかして詳しい話を聞く。

「どういう事だ……ジェニス」

「だから、彼らを恨んでる人間なんて腐るほど居るって言うてるの。」

例えば、あいつらのプロデュースのせいで売れなかったオペラ歌

手や踊り子なんてそれこそ何人居るかわかったものじゃないわ。あいつらのせいで人生をダメにされた人間なんてね」

「じゃあ、例えば……あそこに居る3人はどうだ？」

こっそりとエルシャルがブレイズ、カトリーヌ、フェルプスの3人を指さす。

「そうね……まずシルバー・ブレイズは……半年前にリゼルに主役を降板させられてるわ。それも公演の2日前に。しかも、その時の主役はリゼルの親戚の女の子。高飛車で嫌な子だった上に実力もなかったからおかげで公演は大失敗」

「うわぁ……」

「次にカトリーヌ・カニングムだけど、彼女は母親がセント・サイモンの愛人だったの。しかも新しい愛人を見つけたサイモンは彼女の母親を軽く捨ててその女になびいたらしいわよ。しかも、その新しい愛人を捨てる今度はカトリーヌ自身に言い寄ってたみたい。」

「……………」

「最後にパーシー・フェルプスだけど……彼は個人的にリゼルのことが好きだったみたい。ほら、彼って……コレでしょ？」

そう言ってジェニス は右手の手の甲を左頬に寄せる。

「オカマか……」

「ええ……でも、リゼルは結婚してるから手に入らないのは明白だし、サイモンからはあの得意な性格のせいで、大分苛められてたみたいよ?」
『こんな男女にメイクが務まるか!』
『つてずっと笑われてたみたい』

つまり殺される原因は全員にあるってことか

「ついでにこのホテルの支配人も副支配人も脅されてたみたいよ? 共同公演はこのホテルの近くの劇場だから、それによって生まれるホテルの売上の30%を買収しようとしたみたい……あと、グルメで有名なりゼルとサイモンのことだから、きっとシェフやボーイに対しても厳しい態度だったと思うわ。それで逆恨みされることもあったかもね」

……

前言撤回。今回の事件は犯人の可能性がある人物が多すぎる。
とりあえず現状で上がってるだけでもブレイズ、カトリーヌ、フェルプス。

「あ……それと犯人っぽいって言うなら警部も。」

「警部?」

「オペラを観劇に来てたときに、『事件の捜査もせずオペラ鑑賞

とは優雅な身分ですな』とか『警察であることを利用して一般人がオペラという貴族の嗜みに土足で踏み込んでる』とか『警察とは地位を買うためにあるのだな』とか散々罵倒されてるのを聞いたってこの前、劇場の売店の子から聞いた。」

警部まで……

うーん……となると……きついなあ……

現状ではブレイズ、カトリーヌ、フェルプス。そして可能性は薄いが警部も入る。

そして、問題なのはまだ見ぬ不特定多数が容疑者として上がるといふ事実だ。

おそらく容疑者リストを作ったら200人とか300人とか上がるタイプのケース。

「めんどくさい……」

頂垂れるようにエルシャールが顔を覆って天を見上げた。

さて、どうやって捜査を薦めていくべきか……

こういう場合のセオリーでは時間と人数をかけて、尾行や身辺調査などを進め犯人を割り出していくのだが……

けれども、今回の事件は……すでに2人が殺されている上に、犯人はおそらく同一犯だと思われる連続殺人事件。

となれば、2回あれば3回目があるだろう。

なほ……

「ジエニス」

「？」

「残った劇場関係者の3人で、恨みを買ってそんな人間は居るか？」

それが先行する。

対し、ジエニスは……溜息と共に両手を腰に当てた。

「それもさつきと同じ。数えきれないくらい居るわ。ブレイズさんはあの気丈すぎる性格と他人を見下すような態度で嫌われてるし……それに彼女が今の……タイニン記念劇場のトップになったのには常に黒い噂がつきまどってるの」

「黒い噂？」

「ええ……大きな声じゃ言えないけど、売れそうな新人は自分のファンクラブを使って、徹底的な嫌がらせをして、中には強姦されそうになった子も居るらしいわ。そして自分はプロデューサーに取り入って、上位の配役をもらってたらしいわよ？なにせ、配役のためにプロデューサーと寝たって話すらあるぐらいだしね」

「うわぁ……」

「で、カトリーヌはいわばブレイズの王立劇場版。私がトップで居る限りはある程度は抑制できてるんだけど、彼女のほうが先輩だから、どうしても無くすことはできないわね……ついでに、スタイルストとか他の劇団の人とかにもすごいキツイダメ出ししたりする割には自分の演技に甘いから、随分と嫌われてるかな」

「なんか……優美なオペラの世界も大変なんだな……」

「まあ、遊びでやってるわけじゃないからね。後は、フェルプスだけど……彼の場合、かつこいい男を連れてる女優に対して嫉妬して嫌がらせしたり、あと、綺麗過ぎる女優とか、逆に綺麗じゃない女優とかに対して嫉妬とか嘲笑で仕事の手を抜いたりするから」

「逆恨みされる理由大有りか………」

まったく……次に殺されるかもしれない人物すらわからないって

……
どんだけめんどくさいんだ、この事件は………」

さて……

どうしたものか……

エルシャールが腕組みをしながら考え込んでると、後ろでは警部が全員の昨夜のアリバイを調べていた。

だがやはりというか当然というか……

全員にアリバイは無かった。

まあ、警部の言葉をそのまま伝えると「死亡推定時刻と思われる昨夜の深夜1時から3時までの間にみなさん何をしておりましたかな？」と言われれば普通に「自室で寝てました」あるいは「自室で何かをしてました」以外の選択肢がある人など居ないだろう。

また全員のアリバイがない。

むしろここにいる全員が犯人の可能性が出てくる。

全員が犯人かもしれない、全員が次の殺人の標的になるかもしれない可能性を秘めた今回の事件。

警部もおそらくここまで難しい事件になるとは考えていなかっただろう。

灰色の脳細胞を使って、エルシャールは必死に事件の解決方法を模索する。

そして出した結論は……

「やっぱり、殺される人間を探すのが先決だな……………」

人身を守るという意味もあるが、殺されそうになった人間が容疑者から除外されるという意味合いが大きい。すなわち消去法によって、犯人を絞り上げていく。

ホームズやポアロやバートンが聞いたら確実に苦言を呈しそうな解決方法だが、それが一番現実的だ。もちろんその過程で推理もして、出来る限り早く犯人を追い詰めるつもりではいるが……………とりあえず、コレで、エルシャーの捜査方針は固まった。

さて……………では、犯人をおいつめることにしよう……………
この逃げられないホテルの中で……………

迷宮という名の事件は続く。

捜査方針（後書き）

2人目の殺人が起きました。

連続殺人となる中でエルシャールの灰色の脳細胞は何を考える！

とか言ってみたり……

楽しんで呼んでいただければ幸いです。

お楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0311s/>

PHANTOM FORD

2011年10月8日22時28分発行